

SRID NEWSLETTER

No. 370 SEPTEMBER 2006 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

9月号

国家戦略とODA

国際開発ジャーナル主幹 荒木 光弥

お知らせ

1. 幹事会 10月6日(金) 午後6時30分から 国際協力銀行にて

2. 懇談会

○日時：9月25日 18:30-20:30頃

○テーマ：『日本・アジア・アフリカ：農村社会開発の評価と展望』

○発題者：高瀬国雄氏（IDC J顧問、AJF理事、TCSF理事、SRID会員）

○会場：国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室

3. シンポジウム

○日時：2006年10月28日(土) 10:00～17:00

○場所：JICA 国際協力総合研修所（市ヶ谷）

○テーマ：「新たな開発協力のあり方：拡大する脆弱国家群への取り組み」

4. 開発支援 「会員アンケート」

今後、会員の開発活動支援を考える参考として、アンケートを実施することに致しました。ご多忙中恐縮ですが、9月30日(土) までに、ご回答いただけるようお願い致します。

国家戦略とODA

国際開発ジャーナル 主幹 荒木 光弥

去る5月、北京大学「現代日本研究センター」の研修生20人（博士課程院生）が訪日し、東京では研修の一環として政策研究大学院大学を表敬訪問した。その時、「日中交流のあり方」や「日本のODAの歴史」の講義プログラムが生まれ、前者を元国会議員の林義郎・日中友好会館会長が、後者を筆者が受けもった。

筆者はODAの歴史を「国家戦略からみた日本の対外政策としてのODA」というアングルから体験的に語った。「国家戦略」とは、ずいぶん竹刀（しない）を上段に構えたものだという人もいるかもしれないが、将来、中国の指導的地位につくことが予想される北京大学院生にとって、公式の「ODA白書」では知り得ない「国家戦略」という言葉は知的刺激になると思ったからである。

それでは、筆者の語った本当の話とは何か。次にその概略を述べてみたい。

(1) 50年代「国際社会への復帰」の時代。

1951年のサンフランシスコ対日平和条約の第14条賠償規定は「役務賠償」であった。戦勝国アメリカの強い指導力で戦争賠償を現金支払いから役務（現物供与など）にしたことが、敗戦国日本の戦後復興を加速させる大きな一因になった。こうした背景には、朝鮮戦争の勃発に伴って、アメリカはアジアにおける共産主義の浸透を深刻に受け止めて、日本列島を対アジア極東の軍事戦略上の前線にするために、日本の早急なる復興を後押しする政策意図があったからである。こうして、日本は好むと好まざるとにかかわらず、アジア極東における“冷戦”において、占領国アメリカに組みすることになった。

日本の国益は、賠償で東南アジアにおける日本への信頼を回復させるとともに、一刻も早く戦前の国際連盟脱退の状況から戦後の国連加盟など国際社会への復帰をめざすことであった。ODA開始となった54年のコロンボプラン加盟も最初は反対意見もあったが、アメリカの仲介で加盟が実現した。こうして56年に国連加盟を果たすが、日本はアメリカの思惑にもかかわらず着実に戦後経済復興と国際社会への復帰という国益を果たしていった。

(2) 賠償で十分学習した経済協力は、国際社会復帰後の東南アジア政策と同時に経済復興を遂げるために必要な輸出力強化（輸出振興政策）と資源確保の手段として重要な役割を果たした。

日本の東南アジア政策では中国共産主義の南下（ドミノ理論）を防ぐために、アメリカとの役割分担の一翼を担って、経済を中心に東南アジア諸国連合（原ASEAN）の誕生をバックアップした。

その間、日本の輸出振興と資源確保政策などのあくなき国益追求は、そのうち「エコノミック・アニマル」日本と呼ばれ、日本は大いに反省し、70年代末から ODA 倍増、3 倍増を打ち出して、国際社会（とくに開発途上国）への国際貢献を国策として採用した。つまり、国際社会とのハーモナイゼーションを求めたのである（一人の院生はポツンと「経済援助と資源確保とエコノミック・アニマルは今の中国にも参考になりますね」といった）。80 年からいよいよ対中 ODA が開始された。アメリカのベトナム戦争終結へ向けた政策のなかでの対中政策の変更に伴い、日本も「閉ざされた中国」から「開かれた中国」へ向け協力することがアジアの平和と安定に寄与するものとし、日中国交正常化から日中平和友好条約の締結へ向けて努力し、80 年の対中 ODA 開始となった。

(3) 筆者は 80 年に谷牧副首相と会い、円借款第一号の北京- 秦皇島間の鉄道電化と複線化、そして秦皇島の港湾開発協力取材し、15 年後に再びここを訪ねた体験談を交えながら、感想を述べた。

95 年に再び秦皇島港湾取材して驚かされた。まさか 15 年であれほどの近代港になるとは夢にも思っていなかった。筆者は東南アジア諸国への外国援助が国の発展にどれほど反映されているかを見てきたが、こと中国の発展に関してはそうした経験知が当てはまらないと思った。もともとあった“自立更生思想”に火をつけたといえればそれまでだが、それ以上の民族的というか、歴史的大国の DNA というか、技術・ノウハウ吸収能力など他の途上国に見られない潜在能力を痛感した。たぶん古い中国を知っている人びと、そうした知識を継承している人びとは、中国人の近代化への能力を低く見ていたように思う。そういう人たちには大きな誤算が生まれ、その反動として「アンチ中国意識」が燃え上がった。それが対中円借款廃止へ拍車がかかったのではないか。つまり「開かれた中国」への援助が功を奏して、「開かれすぎた中国」、驚異的な経済発展を土台に「政治大国」へ変身することを予測していなかったようにも感じる。

訪日学生の代表は「今日は本当の話を聞いた感じだ。日本の ODA に関して今までこういう話は聞いたことがなかった」と挨拶した。友好は、本当の話をし、本当の姿を見せることから始まる、と信じている筆者にとって学生たちの「シェシェ（感謝）」の連発は自己満足といわれるかもしれないが、心温まる思いであった。